

じゃわていー

「よし、これでいい筈……つと」

卓馬は机の下で、時代遅れの物理通信ケーブルをコンピュータに接続し、これまた時代遅れの液晶フラットディスプレイを睨みながら、難しい顔でキーボードを叩いた。人差し指で、慎重に。「んー……、おっ、きたきた！繋がったぞ！」

ディスプレイにはキー打鍵から一拍遅れで「エントランス」サイトがロードされていた。黒地に赤字の警告文。如何わしき満点のレトロな入口だが、却ってそれが卓馬には新鮮で興奮を誘った。ろくに内容を読みもせず、夢中でキーを操作してリンクを辿っていく。普段とは違う操作方法に四苦八苦しなから、目的のサイトを探す。

「聞いてた通りだけど、うわあ……こんなのなんだ。確かにこれなら、ばれなさそう……」  
目的のサイト。それは単なるチャットルームだ。そこでは友達が待っている筈で、だから卓馬は急いでいた。

——大人達に監視されない世界、行ってみないか？

そう誘われたのが、事の始まり。今の世界は、一つに繋がっていて、繋がりが過ぎていて、がんじがらめだった。指輪型のデバイスを指に嵌めるだけでゲームができるし、名前を呼ぶだけで友達を呼び出して、話しながら一緒にプレイもできる。便利と言えば便利だ。けれどその行動は、

全て監視されているという。

ManaMana-Net——世界を一つに、お手軽に、のCMでお馴染みの、公共機関。そしてそこが提供しているネットワークの名前だ。ゲームはMM-Net上で動作しているし、友達ともMM-Netを介して会話する。接続には必ずチップを埋め込む必要があつて、それで個人を識別してきめ細かいサービスを提供する。——嘘は吐いていませんよ、そう言う誰かの声が聞こえてきそうだ。確かにサービスはきめ細かい。けれど学校の帰りに寄り道しただけで親に警告通知が飛んだりするのは、いくらなんでも細か過ぎるんじゃないのか。少し、大人向けの商品が並んでいる一角ではあつたけど……。

勿論本人の承認なしには他者に情報は渡しません、なんてMM-Netは言っているけれど、親が契約しているんだから、子供に拒否する権利なんてあるわけがない。それに大人になつても「著しく公共性を害すると判断される場合」、管理当局へ通報されることになっている。これは昔に色々大規模な犯罪があつたかららしいけど、でも結局それは全部監視されてるってことじゃないか。こんな社会から少しでも自由になれるなら、少しくらい苦労したつていい。だから予想外に重いハコを、あいつの家から運ぶ羽目になつたつて、辛くはなかつた。

\*

卓馬はようやく部屋チャットルーム  
プライベートに辿り着いた。自分の名前を入力する必要があつたが、これは事前に決めていた。ここには自由プライベートを求めて来たのだ。自分のことを指していて、なおかつ自分とわからない名前がいい——UK@t。そう打ち込んだ。部屋の名前とパスワードは事前に打合せてある。

—> JOIN: uk@t さんが入室しました

zink: よう、やっときたな

zink: Welcome to Internet!

uk@t: ?

zink: あー、まだ知らないか。ここはInternetっていうネットワークなんだ。MM-Netより遙か以前に使われてたネットワークなんだが、今もまだ動いてる。

zink: ま、自由にやれるならどこでも関係ないけどな！

uk@t: むかしからあるって、大丈夫か？かんし

zink: 当然監視はされてるさ。でも規制が緩くってな、暗号化すればやりとりの内容はバレない。MM-Netでは自由に暗号化もできないからな。

uk@t: へえ

zink: 昔に何があったか知らないが、通信盗聴を保証するネットワークを推進するとか、国連つてのは何考えてるのかね？

uk@t: さあ

zink: 反応薄いなww まだキーボードに慣れてないだけだろうけどw

uk@t: うん n

zink: OK OK じゃあInternetに慣れるのにいいサイト紹介してやるよ！

それからzink——クラスメイトの風見陣——は、<sup>アドレス</sup>URIを幾つか紹介して、<sup>チャットルーム</sup>部屋から出ていった。

卓馬は肩から力を抜き、深呼吸。いつの間にか全身が緊張していた。陣が畳み掛けるように言葉<sup>チャット</sup>を打ってくる間、必死で返答を返そうとしたが、うまくいかなかった。胸に燻っていたのは——置いて行かれたような焦り。自転車の授業で、自分だけ乗れずスタート地点で何度もこけて、泣きそうになったことを思い出す。

言われた通りに動くのは癪だったが、他に情報もない。卓馬は紹介されたサイトを見てみることにした。

しかし……、あの陣が紹介してくるサイトなんて、碌なものじゃなさそうだ。片眉と口の片端を上げる、いつもの悪い笑みが目に浮かぶ。

サイトを開いてみると、いきなり大きなロゴ——VMG: Virus Mania Guilty。憎しみを込めたような血文字調だった。しかしその他は至って普通で、アニメや音楽の紹介ページが並ぶばかり。気になるのは紹介文の横に、必ずピンク髪のアニメキャラの画像が置いてあることだった。ポーズに何パターンかのバリエーションはあったが、全てお団子頭のピンク髪だった。それ以外に変わったところは見当たらない。サイト説明文らしきものには「好きな娘をお持ち帰り下さい。魔法の呪文であら不思議！あとはお楽しみ下さい……」などと書かれている。

この紹介文によれば、おそらくピンク髪の画像を保存しろ、と言っているように思える。ということは、何らかの「呪文」で手を加えれば、アニメや音楽が見放題ってことか……？陣の意図がようやくよく見えてきたぞ。しかし、何をすればいいんだ……？

→ JOIN: uk@t さんが入室しました

uk@t: わからん

zink: ん？昨日のやつか？ん？

uk@t: そうだよ

zink: そうかー。お前でもわからんか。クラス一の秀才のお前がか。そうかー。

uk@t: 一晩考えてもわからないか 教えてくれないか 仕組みが気になる

zink: そつちかよ！まあいいや、最初から教える気だったしな。

zink: あそこのサイトはAkarinatorっていうステガノの一種を使って、画像にファイルが埋め込まれてるんだ。専用のツールで復元できる。

zink: 復元すると中から画像1枚とアドレスの一覧が出てくるから、一覧に載ってる圧縮ファイルを全部落として、普通に解凍する。

zink: ただし暗号化キーを要求されるから、一覧と一緒に出てきた画像を食わせれば終わりだ。

uk@t: ややこしいな そのツールはどこに？

zink: 自分で調べろ……って調べ方がわからないか。あそこリンクないもんな。あとで検索サイト教えるわ。

zink: サイトによって手順は違うけど、基本はツールの組み合わせだ。パズルみたいなもんさ。

zink: 慣れれば結構面白いぜ。わからないと悔しいけどなw

uk@t: ところでなんでピンク髪なんだ？

zink: あー、たぶんツールをオッサンが作ったんだろ。昔のアニメのキャラらしい。

そこから卓馬はのめり込んだ。陣に教えてもらった検索サイトは役に立ったが、精度は良くなかった。例えば最初に教えてもらったサイトは検索にひっかからなかったし、検索結果にリンク切れも多かった。しかし大手と思しき大規模なリンク集は見つかった。そこを手掛りに辿っていくことで、様々なサイトに手を伸ばしていった。動画、音楽、ゲーム、アダルトコンテンツ、等々——家庭で作れる爆弾の製法、といった怪しい情報もあった。怪情報は人気のコンテンツで、中身は例えば、こんな調子だ。

今や人類は巧妙に飼い慣らされている。どうしてほぼ全ての人間が監視に抵抗しないと思う？もう洗脳されてるんだよ。よくあるような、無味乾燥な管理社会なんかじゃない、手厚いサービスにストレスケアもばっちりの現代社会だけど、それこそがシステムだ。

かつて金儲けのためのシステムとして発達した頃ならまだよかったが、今は政治的に人を管理するためのものだ。繰り返し与えられる偏向した情報、心理学に裏打ちされた誘導質問、そういう刷り込みが非常にゆっくりと進行し、ほぼ完成してしまった。全世界的に、最高の技術で、一人一人の性質に合わせて、違和感を感じないよう緩慢に。だから誰も気付かなかったんだ。ただ、初期段階で子供達に精神発達上の障害が見られたために、このプロセスは幼年期には殆ど施されていない。だから10代前半ならばまだ——

——よくある陰謀論、というには少し心当たりがあるなあ。しかし嘘を吐くコツってのは、少しの真実を混ぜることだっていうし、鵜呑みにはできないかな。そもそも書いた当人は、どういう状況下にあるのか謎だし……。それにこれが本当だったとして、どうってこともない。法律と罰則がある時点で自由意思なんて制限されてるんだし、その法律に沿うよう「心理的教育」がさされているってのは常識だ。それを言い方を変えて扇動してるんだろうけど……。案外これを書いた奴も子供で、監視から抜け出したい一心からこんな文章を書いたのかも。でもそうすると、人々を扇動して、社会を革命しようってことか？ うーん……。他人と力を合わせてってのは、うまくいかないだろうなあ……。

卓馬はシニカルだった。人の心は不安定で、それは自分自身を省みて明白だ。ならば他人は信用できない。そういう思想だった。だから興味の方向は、システムに向く。論理的に動くものは信頼できる。卓馬が興味を持ったのは、ゲームでもアダルトコンテンツでもなく、システムを弄るツールだった。まずMM-NetとInternetを接続するツール——Rainbow。そしてその上で動く、身元を偽装して電話・メールするツール——Peeping Masquerade。特定の個人に向けて大量の情報を送り付け、一時的にMM-Netとの接続を落とすツール——Smart Bomber。そういうものが、いとも簡単に手に入った。

——これ、ほんとに使えるのか……。？ 使えたら、やばいよな……。攻撃と偽装を組合せれば、簡単になりすましができるじゃないか。……。いや、攻撃された本人にはすぐ異変が起こるから、一発でアウトか。でもうまく踏み台を経由してこちらの情報を誤魔化せれば、使い道はあるんじゃない

やないか……？

考えながら、ツールを開く。接続ツールは以前に設定済みだった。攻撃ツールの圧縮ファイルを開いてみる……と、中から種別がわからないファイルが出てきた。ここからはパズルだ。まずはファイルの中身を覗き見てみる——バイナリエディタでダンプだ。先頭に特徴的な文字列を確認。どうやら実行形式らしい。早速実行してみる、と、パスワードを要求された。典型的なパスワードを一通り試し、ああ、これは埒が開かないな、と思った卓馬は作戦を切り替えた。一旦実行終了し、デバッグ経由で再起動する——プログラムの途中状態を見たり、変更したりするのだ。何か確信があったわけではなく、ヒントが見つければ儲け物、くらいに考えていたが、答えはあっさり見付かった。パスワードチェック部で固定文字列との照合を発見——どうやら暗号化の類いではなかったらしい。固定文字列を抽出し、それを打ち込む。パスワードを突破。不吉なピエロと祝辞が表示され、見たところ普通のセットアップが開始した。これでパズルは終わりのようだ。そこそこの難易度だった。

早速起動しようとしたが、そこで卓馬は異変に気付いた。今は何も実行していないにも関わらず、コンピュータが音を立ててフル稼働していたのだ。嫌な予感がして実行中一覧を呼び出す——見慣れない名前が100個くらいあった。やられた、さっきのピエロか……！まずは落ち着いて状況を見極める——記憶装置への入出力量、通信量、共に増大中。嫌な予感を確認に変えつつ、記憶装置の状況を確認。ファイルが徐々に消えていっていた。システム構成ファイル自体が消え始めているため、恐らく電源を落とせば二度と起動しなくなるだろう。次に通信を確認。複数の場所へ、保存されていたファイルが送信されていた。この時点で卓馬は迷わず通信ケーブルと電

源を引き抜いた。

\*

落ち着かない……。あれから三日経つ。コンピュータはやはり再起不能だった。俺は最善の対処をした、筈だ。しかし完全に被害を防げたわけじゃない。送信された情報には、俺の個人情報アップロードが含まれていたかもしれない。

怪情報では、こういう場合どうなっていたか。確か程度によって対応が変わったけれど、違法なネットワーク利用者にはネットワーク利用に制限がかかるという話だった。これから一生……。まだ何の接触もないが、監視が強化されているのを感じる。気のせいかもしれない。そもそも怪文書の情報は信頼できないかもしれない。判断不能、無為な思考だ。

あとどれくらい、こんな気持ちが続くのか——いつそのこと。

(了)

宣言通り似非SFです。所謂アナログ・ホールの延長線上で発想しています。出てくる道具については、昔あった実際の技術やサイトをモデルにしていたり。知っている人だけニヤリとして頂ければ。

文体は前2作とも1人称視点でしたが、今回は明確な3人称を織り交ぜてみました。そのへんで今回挑戦をしています。うまくいつているかは謎。内容は割と捻りなく書いたつもり。文体は、直前に沖方丁をしこたま読んだので、影響されている感じがしないでもありません。

背景的な面では、インターネットとMMORPGはインフラレベルでは同じものであるため、インターネットが未だに生きているという設定です。インターネット自体が既に今から数度更新されていて機能が拡張されている状況下、それをフルリプレイスして新規ネットワークを作るのはコストも工期もかかるため、現実路線としてインターネットの上にレイヤーを上乗せする形のネットワークとして設計された……というのを今適当に考えました。そんな感じで割と適当です。

ネット上での「大規模な犯罪」が過去にあったという話は、まあ色々あったんでしょう。子供には関係のない話です。成長した頃には、また考えることもあるでしょう……。